

## 知 識 探 訪

## 多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

## 佐賀県で撮影されたマレーシアドラマ「From Saga With Love」

丸山洋子(通訳・翻訳、通訳ガイド、マレーシアロケ誘致コーディネーター)



「From Saga With Love」シーズン1のポスター(佐賀県提供)

昨今「ロケツーリズム」に取り組んでいる自治体は多いが、佐賀県は2013年よりタイを皮切りに東南アジアからのロケ誘致に注力しており、同県で撮影を行う海外の制作会社に対し最大500万円の助成金を提供している。撮影作品のヒットもあり、同県を訪れたタイ人の宿泊者数は6年間で20倍以上増加した。

映像を通じて県の認知度向上と観光振興を図る佐賀県フィルムコミッションは19年よりマレーシア作品のロケ誘致を行っていたが、新型コロナウイルスのまん延により動きの取れない状態が2年以上続いた。しかし、コロナ前に下見で佐賀県を訪れ、その美しさに感銘を受けたプロデューサーの希望で海外との往来が可能になった22年秋以降より具体的な打ち合わせを始め、翌年6月に「From Saga With Love」というマレーシアドラマが佐賀県で撮影された。

本作は家族関係や恋愛、仕事などそれぞれの葛藤を抱えた4人のマレーシアの若者が佐賀県で出会い、さまざまな問題を乗り越えながら成長するラブコメディ。主人公の1人は有田焼の窯元で修行中という設定である。

1話30分計10話のうち、7割以上の撮影が有田や嬉野など県内6市町10カ所で行われ、23年9月に本作がマレーシアをはじめとした東南アジア、中東など16カ国・地域で展開する動画配信サービス「Viu(ビュー)」で放映されるとマレーシアで瞬く間に大ヒットし、TikTok(ティックトック)での関連動画再生回数が1億回を超え、シーズン2を望む視聴者の声交流サイト(SNS)にあふれた。

そして24年5月に、シーズン2の撮影が前作を大幅に上回る県内8市町30カ所で約3週間にわたり行われた。

当方はコーディネーターとして下見のアテンド、撮影の日程調整、台本やシーンごとの撮影内容の和訳を日本側の関係者へ共有、ワッツアップやオンライン会

議などにおける日マ間のコミュニケーションの補助などを行った。また、同作では現地および日本人俳優による日本語のセリフがかなり多く、原語版を基に日本語の台本を作成し、撮影現場では通訳に加え撮影時のセリフの発音チェックなども行った。

加えて彼らのスケジュール管理、移動の手配などの付き人的な役割も任せられ、非常に貴重な経験となった。

現地、国内スタッフ、俳優など計30人を超える大所帯で県内各地を移動しながらの撮影であったが、佐賀県フィルムコミッションをはじめ、国内制作会社、撮影地の方々の見事な連携プレーで、宿泊、車両、宗教に配慮した食事の手配、空港や警察署を含むさまざまな撮影地への撮影許可申請などを行い、大きなトラブルもなく無事に撮影を終了した。

撮影はしばしば早朝から深夜、夕方から翌朝までなどの長時間に及んだが、毎回撮影開始前に皆でお祈りをし、撮影中も声を荒らげるようなこともなく、慣れない異国での状況の中にも笑いのネタを見つけ終始和やかな雰囲気の中で撮影を進めるマレーシア人たちの適応能力、コミュニケーション能力の高さに改めて感服した。

マレーシアでは00年代初頭頃までは現地で日本のドラマが放映されることもあったが、その後は韓国ドラマに席卷されている。今回同作の大ヒットにつながったのは、日本のコンテンツをそのまま輸入するのではなく、マレーシア人から見た佐賀県や日本の魅力を盛り込んだ作品であったことが要因の一つであったと考える。偶然にも「SAGA」は国産車の名称にも使用されているマレー語で、マレーシア人にとっては受け入れやすい。

シーズン1は日本国内でも日本のインターネットテレビ「ABEMA」にて24年10月から1年間限定で字幕付きで無料視聴可能で、佐賀県では同作の日本語、英語、マレー語に対応したデジタルロケ地マップを制作し、マレーシア人はもちろん、同作を視聴した日本人も誘客につなげる狙いを立てている。

## &lt; 筆者紹介 &gt;

1972年兵庫県生まれ。青年海外協力隊、留学、国際交流基金「日本語パートナーズ」、現地メディア・エンターテインメント会社勤務などで計6年半マレーシアに滞在。現在は高知県を拠点に通訳ガイド、通訳・翻訳、マレーシアロケ誘致コーディネーターなどの活動を行う。